

【研修報告】

American College of Physicians Internal Medicine 2012 in New Orleans, LA: An Old Life in Deep South

宇野久光*

はじめに

米国内科学会 American Associations of Physicians (ACP) の Internal Medicine 2012 に参加した。ACP は 1915 年創立の単科の学会としては世界最大規模の学会で、米国の各州、米陸海空の 3 軍、カナダ、ラテンアメリカ各国の支部 Chapter などに加えて、日本支部が 2003 年に創設された。ACP の annual meeting に参加するのは今回で 3 度目である。今回は Chapter Award の Volunteerism and Community Service Award の受賞で Convocation Ceremony への招待状が来た。また、日本支部としての Japan Reception への参加の仕事もあった。開催地は米国ルイジアナ州の New Orleans であった。いわゆる、Deep South であると同時に old south の観光地でもある。New Orleans に行く航空路にはいくつかあるが、時間と経済性から、私は Dallas 経由をとることにした。

Internal Medicine 2012

Dallas から New Orleans まで、2 時間程度である。この街の真ん中を南北に走っている Canal St の東側が後述する French Quarter で反対の東側が Central Business District (CBD) である。この地区の海岸近くに、10 ホールを有する巨大な Convention Center があった。Internal Medicine 2012 は、このうち 2 つのホールを使って開催された。筆者がこれまで参加した学会の Convention Center としては、世界最大級の広さであった。この地がいかに米国有数の観光地であるかを物語っており、同時にこの地域に対する経済支援策でもあるように思った。New Orleans らしく、会場入り口では、ジャズバンドが出迎えてくれた (図 1)。

さて、ACP の年次総会の特徴は、臨床教育の場であり、内科の膨大な領域に亘って、教育講演があるばかりではなく、あらかじめ申し込めば、各種症

例について実際に討論と指導を受けながら、治療法を学ぶこともできる。さらにこちらも事前申し込み制であるが内科医に必要な各種の検査、治療手技等の訓練を受けることができる。眼底検査、関節内注射、救急蘇生、内視鏡、超音波、小手術等々、メニューは多彩であった (写真 2)。日本より進んでいると



図 1. New Orleans の会場の Ernest N. Morial Convention Center と会場内での jazz band の歓迎演奏。



図 2. 会場場での各種検査手技の指導風景、手前は眼底検査。

* 日本赤十字広島看護大学

思ったのは、これらの手技を訓練する多くの人体ロボットが用意されたことである。我が国の内科学会も数年前よりこれを見習い、小規模ではあるが、内科学会会場での若い医師に対する内科の技術の実技指導講習会を始めた。

私は今回の目的の一つである、脂質異常症の米国における治療の現状と私の専門の血液の講演等を中心に会場を渡り歩いた。

米国では病院の医師が毎年半数近く変わるといわれているが、厳しい専門資格、契約、経営、年俸などという言葉が浮かぶ。このような、事情を反映してか、総会場には、ACP JOB REPLACEMENT CENTERが並置されており、各種ガイドやオリエンテーション、財務相談まであった。米国医療事情を反映するものとして興味深かった。

Convocation Ceremony

ACPのConvocation Ceremonyについては、以前本誌で詳しく報告したので、以下今回の式のことを報告する。

ACPのConvocation ProgramのLaureate/Chapter AwardsのところにJapan Hisamitsu Unoとあった。ACP年次集会では、ACPのFellowshipをはじめとする会員の昇格や各種受賞の表彰式が、Ceremonyの厳粛な雰囲気の中で挙行される。Fellowship昇格で初めてregaliaを身にまとい、ACPの医師としての誓詞を会場で皆と一緒に唱和した時は、それなりに精神が高揚した。やはり、何事にも儀式は必要であるとその時思った。今回はあらかじめメールで知らせておいたサイズのregaliaと帽子を受け取ると、日本から来た初めてregaliaを着る医師の記念写真を撮ってあげたりと比較的余裕があった。それでも広い会場内で挙行される儀式に列席すると感激し、それなりに意を新たにすることがあった(図3)。

Japan Reception

ACPには、International ReceptionとChapter Receptionの2通りのReceptionがある。前者は日本の学会の懇親会と同じである。後者は各Chapterがホストとなり、他のChapterの来客を接待する。接待といってもわがJapan Chapterの財政状況は豊かとはいえないので、Cheese and Wine Partyに毛の生えたようなものしか準備できない。後は会話と、笑顔である。毎年Japan Chapterを訪ねてくれる各地、各国のおなじみの顔がみられた。さらに、今回のACP会長のVirginia L. Hood教授もきて



図3. Volunteerism and Community Service AwardでConvocation Ceremonyに列席した筆者。



図4. Japan Reception (左)とACP会長のVirginia L. Hood教授と筆者(右)。

くれた。教授の専門はnephrologyであるようだが、素敵笑顔で気さくに会話をしてくれた(図4)。

来客者の中には、米国で医師として長い年月働かれ、米国帰化されている日本人も何人かおられ、毎年このReceptionで日本人医師に合うのを楽しみにしておられるご年配の懐かしいお顔を見られた。

フレンチ・クォーター-French Quarterのことなど

そもそもNew Orleansという地名は、フランス語のLa Nouvelle-Orléans(新オルレアン)の英語訳で、ルイ15世の摂政オルレアン公フィリップ2世に因み、フランス領として1718年に設立された。途中スペイン領となり、1801年再びフランス領となったが、直ぐに米国に売却された。フレンチ・クォーター-French Quarterは、フランス植民地やスペイン統治を経て、当時の街並みを残す地域である。ルイジアナ州で、フランス人、アフリカ人、スペイン人と先住民を先祖に持ち、ルイジアナ買収以前にルイジアナで生まれた人々とその子孫、また彼らと関わりのある事物をクレオールと呼び、それらを一緒にしてクレオール文化という。

私の宿泊したホテルは、New Orleansを縦に東西に分断しているCanal Stに面しており、道路の向かい側は、フレンチジュォーターである。夕方ともなると、この地区でもっともにぎやかな通りは、Bourbon St. から、ストリートジャズをはじめ、ライブハウスからの音楽などが、観光客の人並みの喧騒とともに聞こえてきた。

New Orleansには、現役の市電としては世界最古といわれている路面電車が走っている。このSt Charles Streetcarは、T. Williamsの「欲望という名の電車 A Streetcar Named Desire」に出てくる電車そのものであり、私は是非ともこの劇の中に出てくる電車に乗ってみたい。学会の会場のConvention Centerからの帰りに、北に数ブロック歩いて、路面電車の軌道を見つけ、ホテルのあるCanal St. まで乗った。車内は古い木造で、観光客で一杯であった。ホテルに着くまでわずか15分位の乗車であったが、窓外にかつての風景を想起し、それなりに満足した。

学会の会長の挨拶文にも With an abundance of jazz という語句があったが、ジャズという音楽は、1900年ごろアメリカ南部のこのNew Orleansで生まれた。

フレンチ・クォーターで最古の建物のひとつに、1750年に建設されたプリザベーション・ホール Preservation Hallがある。1960年代初頭ごろより、ジャズの生演奏をはじめ、現在に至っているという。学会3日目にJapan Receptionの役目を無事終え、Preservation Hallにホテルから歩いて行った。フレンチ・クォーターの建物のなかでもひととき古さが目立った、くすんだ倉庫のような建物であった。入場料15ドルを払い中に入ってみると、まさに壁は剥げ落ち、つぎはぎに塗った塗料の跡と、一言でいえば20m四方の古倉庫である。数列ある木の長椅子は満席で、立ち聴きをした。演奏はいわゆる classic jazzと呼ばれる、南部色の濃い曲目の演奏を聴いた。聴いているとジャズが共同の憩いの場の音楽として発生し、皆で感情を共有し合ったことが良く理解できた。狭く暗いホールでアフリカ系アメリカ人のかつての労働生活に思いを巡らせながら、jazzの歴史もまた、社会の経済形態の変遷を良く反映していることを思った。

終わりに

New Orleansは、ミシシッピー川の河口に発展した都市であり、アフリカ系アメリカ人が過半数を占めるDeep Southの都市である。経済的には貧困層が多いことで知られており、ハリケーン・カトリーヌのときはこのことが世界に配信されてしまった。そのときのテレビ画像で印象的だったのは、貧困層

とおぼしき人々に、超がつく肥満者が多かったことである。実際この地に来て見ると、街に人種を問わず肥満者が見られた。教育と食生活のなせる業であろうか。

毎日タクシーを利用したが、いずれの運転手も高齢の黒人であったが愛想が悪かった。朝食にハンバーグショップに行ったとき、ハンバーグなどを入れた袋が目から離れたときに、盗まれてしまった。また、ギフトショップで、勘定の計算がうまくできない店員に遭遇してしまった。米国のDeep Southのライフスタイルの一端を見たような気がし、医療の質は経済や教育のレベルを反映することを改めて思った次第であった。

メディケイドは、この民間医療保険に加入できない低所得者・身体障害者に対して用意された公的医療制度である。メディケイドに要する費用は、州と連邦政府が共同負担するが、運営自体は州に任されているため、内容は州により異なる。貧困層のありようが州によって異なるからである。州は連邦法により定められた基準を守る限り、独自のメディケイド運営ができるようになっている。メディケイドの支出は増加し続け、Deep Southではこの財政負担が問題となっているようである。

ところで、一介の旅行者の個人的旅情としては、このようなかつての南部アメリカが残っているところが、この地のある種の魅力であろう。私も「欲望という名の電車」に出てくるような、このようなクレオール文化の名残を漂わす街を期待していたのかも知れない。

謝 辞

本学会への参加は日本赤十字広島看護大学の共同研究費で参加した。

文 献

- ACP INTERNIST. 2012年4月1日, <http://www.acpinternist.org/im2012/>
- 宇野久光 (2010). Internal Medicine 2008, the annual meeting of the American College of Physicians, in Washington D. C., Accompanying Convocation Ceremony. 日本赤十字広島看護大学紀要, 10, 69-71.

